

支部歴訪の中で得たもの、果たしたものは？

振り返れば、第1回台湾支部から第18回ウズベキスタン支部までに費やした歳月は25年である。20の訪問先を選ぶにも様々な動機があり、振り返ればそれぞれの意味があるのは当然ながら、反面、一つの大きな流れがあったように思われてならない。

この旅が、25年の歳月を費やし、18回の回を重ねて、遂に20番目の支部に達したことは、「感慨一入」と言うべきであろうか。だが、私には寧ろ「淡々と過ぎた」ような思いである。勿論、それぞれの体験にはそれぞれの思い出が詰まっているが、1年1年の歳月は、過去を振り返るよりも「その次」を追う方に気を取られていたのかもしれない。それでも大きな流れの中には「時の流れ」を感じていることは確かである。

台湾支部で感じたこと

海外支部歴訪の第一歩が台湾支部訪問であったことは、文化委員会の発案である「故宫博物院70周年記念展」の見学に触発されたことであったが、我々がこの第一歩に強い印象を与えられたことは誠に幸運な滑り出しであった。

支部のメンバー構成が、日本統治時代に外語に学んだ方々や、戦後の日本から台湾に赴任された方々、そして戦後の外語大に留学された方々が、渾然一体となって一つの同窓会を和気満々と楽しんで居られる様子が誠に印象的であった。我々訪問団一行を加えて30名を優に超える「台湾東京外語会」の懇親会は国際的な雰囲気醸しながら大盛況であった。思えば、海外支部訪問発足のこの年1995年は戦後50年目の記念すべき年であった。

画期的な会談を果たしたエジプト旅行

台湾支部訪問から14年後の第13回エジプト訪問では、母校から富盛伸夫教授が参加された。富盛教授は母校の国際学術戦略本部代表として、母校のグローバルコミュニティ形成の任務を帯びて、カイロ大学他の大学との折衝に赴かれる途次であった。同時に母校の前アラビア語教授のサルワ先生、現任

教授のハナン先生、更にカイロ大学日本語学科長ハムザ先生も御出席下さって、富盛先生と先生方との御話が弾み、我々訪問者並びに支部の諸氏にも深い関心と呼んだ。殊にハナン先生の外語大A科卒業生の中東に於ける活躍振りの報告は一同に大きな期待を与えて下さったのであった。

富盛先生は翌日からエジプト国内の各大学を訪問されて、交流事業の折衝に当り、旅の最終日に合流して我々と共に帰国された。

このケースに我々幹事一同は深い感銘を与えられ、以後の歴訪に際しても先生方の御参加を期待したが、残念ながら再度の機会を得ることはなかった。

支部の人員構成に見る変化

2010年頃を境にして見られた極めて大きな変化は、主要企業の支店長、役員クラスの中から、外語大出身者が激減した事例の発生である。反面目立つようになったのは若者達の進出である。また、同様に女性の進出が増加している状況も事実である。例えば、第15回トルコ、第16回シドニー、第17回ヤングンの時の支部長は女性である。それは一つの傾向、或いは現象であるが、何故と問うことでもないのである。それ以前に駐在員の滞在期間が全般的に延びた時期があったのはビザの発給と関連していた時期であった。そのような事に気付くのも、旅の副産物かも知れない。

留学生の増加

第17回ミャンマーと第18回ウズベキスタンの交歓会の席には留学生の姿が印象的であった。ミャンマーは11人、ウズベキスタンは3人であったが、7月に期間満了で4人帰国し代って9月に新規入学の3人が到着したという状況は7人の異動であり、これこそ我々訪問者にとっては新たな出来事であった。

在学中の若い留学生が当然のように行き来する状況には、頼もしい印象を受けると共に、それが至極当然のように感じられる処に、私は上述のエジプトの交歓会の情景を思い浮かべていた。あの頃の富盛先生方の御尽力が今軌道に乗って成果を挙げているのかと思うとともに、今回の学長、理事長のメッセー

ジの中に、共に留学生に触れる御挨拶があったことも、それが日常的な事象となっている印象を受けた。

いつの日か、海外支部の交歓会の席で、恩師との再会が果たせるような演出をしてみたいと思うし、

海外支部に日本留学の経験者が何人もいるような光景も目にしたいと、ふと心に浮かんだ。

海外支部 交歓会 (2019年11月記)

海外支部 交歓会